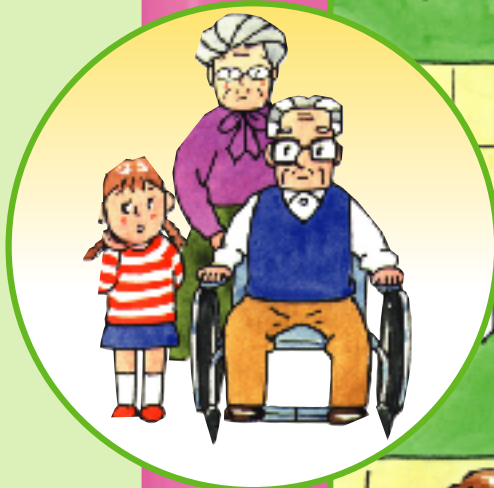


子どもや高齢者は、半人前？



ある休日の朝のことです。



「ねえねえ、
夏休みの旅行は、
遠いところがいいな」



「そうね、おじいちゃんとおばあちゃんに留守番
してもらって…」



「えっ、
おばあちゃんたちは、
行かないの」



「だって無理じゃない」



「なんでダメなの？」



「いいの、子どものくせに、
よけいなことをいわないの
そんなこと考えるひまがあ
ったら、〇〇さんのように
しっかり勉強しなさい」



わたしたちは考えます



私たちは、家庭の中なので、祖父母など高齢者を、無視したり、ないがしろにしたりしてはいないでしょうか。外出や旅行などで、手間がかかるからといって、つい除け者にしてしまうことはありませんか。一方、子どもが何かを口答えをすると、自分の都合が悪かったり、面倒だったり、「子どものくせに」と、つい頭ごなしに叱りつけることはないでしょうか。また、子どもを叱るときに、ほかの子どもと比較することがよくありますが、比較された子どもは、そのことで傷ついています。さらに、「勉強しないといい学校やいい会社に入れなよ」とよくいいます。「いい学校、いい会社」とは何でしょうか。悪い学校や、悪い会社、劣る仕事があるのでしょうか。知らず知らずのうちに親の一面的な価値観を子どもに押し付けているのではないのでしょうか。このように、私たちにとって、もっとも身近な家庭の中でも、差別の芽はあります。人は、性別、身長や体重の差、年齢の差、障害のある人、ない人などすべての人が違います。一人として同じ人はいません。ところが、時として私たちは、「違い」を、人間そのものの価値の「違い」とするかのような言葉を口にしてしまいます。